

変見自在

へんけんじざい

高山正之

恐ろしあ

「戦争とは別の手段で行う政治」とかクラウゼウィッツは言った。

しかし彼がそう規定する前から戦争には伝統的な形があったように思う。

例えば旧約聖書の民数記でモーゼは「戦争とは相手民族の淘汰だ」と言った。

だから敵兵士を皆殺しにするだけでなく、民族の種を持つ男の子は赤ん坊に至るまで殺させた。

人妻も子種を宿している可能性があるから殺した。処女は神から兵士への贈り物で、「生かして楽しめ」とモーゼは言った。

モーゼはまた相手民族の家畜も食糧も富も洗いざらい奪わせた。

戦争とは政治の手段である前に神が許した「殺戮と略奪と強姦」だった。

ただ相手は同じセム族だ。異民族は必須条件ではなく「勝てる相手」ならどこの誰でもいいみたいだ。

それでロシアのイワン雷帝は同じスラブのノブゴロド市を滅ぼすときもモーゼの教えに従った。

まず彼の親衛隊が入り込んで城門を閉め、誰も逃げ出せないようにした。

その上で5週間わたって強姦と略奪を恣にし、貴族から市民に至るまで万人を殺戮した。

そう言えば米宣教師ベイツは東京裁判で「日本軍は南京城を封鎖して略奪と強姦を恣にし、6週間にわたって市民を殺し続けました」と偽りを語った。

何を大ぼらと日本人は思うけれど、イワン雷帝を知る白人たちには怪しむ理由はなかったようだ。

そんなロシア人と最初に出会った日本人は北辺を守る松前藩藩士らだった。

1806年、択捉島紗那で露艦2隻が砲撃してきた。樺太の居留地や利尻島も攻撃され、略奪された。

殺戮略奪に戸惑いはないという風情だった。

次に彼らは対馬を襲った。露艦ボサドニクが浅茅湾に侵入、芋崎の永久租借と女と食糧を差し出せと対馬藩に要求した。

対馬藩が要求を断り、退去を求めるとロシア人は交渉役を殺害して、後は好き放題に略奪していった。

幕府は苦境に立つが、最終的に英公使オールコックの計らいで英艦2隻が出かけて追い払った。

これを機に日本は本気で夷狄に備えて富国強兵策を

取り、43年後の日露戦争で、芋崎での屈辱を倍返ししてやることができた。

非白人国家に負けた屈辱は大きい。スターリンは日本が米国の経済制裁で弱るのを見てノモンハンで挑んできたが、また負けた。

司令官ジュコーフは「あんな苦しい戦いはなかった」と敗北を認めている。

その6年後、ロシアは日本降伏という好機を得た。

武装解除した日本軍は「勝てる相手」のはずだ。

ロシアは日ソ中立条約を一方的に破棄して、まず満洲に攻め込んだ。

銃を置いた日本軍将兵60万人は奴隸としてシベリアに送られ、10年間も強制労働を強いられた。明らかなる国家犯罪だ。

スターリンは南樺太も千島も北方四島も取った。

上が図に乗ると下のロシア人もいい気になる。当時は世界最大級の孫興火力発電所に乗り込んで発電プラント1基をバラして持ち去った。残る1基は支那人が

盗み、今は洛陽で発電を続ける。

ハルビン、新京に進駐すると彼らは邦人の家に押し入って略奪し、女を犯した。

日本人が南に逃げると彼らが後を追う。今の北朝鮮でロシア兵の狼藉はさらに拡大した。

RKB毎日放送の上坪隆の『水子の譜』にはロシア兵に犯され妊娠した19歳の女性の話がある。日本に戻り、麻酔もない状態で墮胎手術を望んで、母子ともに死んだ。

やつとロシア人の魔手から逃れながら、同じように妊娠の重荷に耐えきれず婦選船から身を投じる悲劇が何件もあった。

ウクライナに侵攻した露軍兵士は市民虐殺だけでなく、「略奪した楽器をベラルーシ経由で国に送った」とか、戦地での婦女暴行被害とかの報道が続く。

ロシア人は素朴な民とかじゃない。ノブゴロドの昔から何の変りもない、粗野な民でしかないのだ。

（編集部より）

高山正之氏の本誌連載が、単行本になりました。

『変見自在 バイデンは赤い』（定価1650円）絶賛発売中。